



Title	身体経験と自己意識：『知覚の現象学』における身体概念
Author(s)	東, 昌紀
Citation	カルテシアーナ. 1995, 13, p. 51-71
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66961
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

身体経験と自己意識

—『知覚の現象学』における身体概念

東昌紀

私の身体は私によってはじめて知られているのだらうか。メルロー＝ポンティは「私は自分の身体の前にいるのではなく、私は自分の身体のなかにいるのであり、あるいはむしろ私は自分の身体である」(PP 175)と言つ⁽¹⁾。私が自分の身体であるならば、私は私の身体を経験しているはずであり、私は自分の身体と出会つてゐるはずであらう。

「身体—主観」を主張するメルロー＝ポンティにとって、私による私の身体の経験は同時に「私による私の経験épreuve de moi par moi」(PP 462)を意味するであらう。

そひだりの試論では、メルロー＝ポンティが『知覚の現象学』において「私による私の身体の経験」をどのように開示してゆくのかを検討し、それがどのように表明されるべきであるのかを考察してゆきたいと思う。したがつてこの作業は必然的にメルロー＝ポンティの身体概念を明らかにするものとなるのである。

現象野の開示

『行動の構造』や『知覚の現象学』の序論における綿密な検討を通して、メルロー＝ポンティは、対象的に構成され

た知覚が始源的な領域によつて下から支えられるところを明らかにした。この始源的な領域は、分析と構成からなる可知的、理念的統一体としての客観的世界ではなく、一切の経験がそこに根を下ろしているがゆえに、生きられた世界としての「現象野 champ phénoménal」である。したがつて「哲学の最初の行為は、対象となつてゐる世界の手前にある生きられた世界へと立ち戻る」(PP 69)ことになればならない。

知覚を対象化するところとば、たゞえば生物の「運動志向 intentions motrices」を客観的な運動へと転換し、それを神経機構によつて説明するところへとやである。それからいとこゝへと、感覚するところは諸性質の単なる受容とこゝへとなり、それらは「感情性 affectivité」や「運動性 motricité」がく切ら離れてしきめう。⁽²⁾ そりでメルロー＝ポンティは対象へと還元される手前の、現象野における身体の検討へと向かうのである。

といふで現象野の開示とそこにおける身体のあり方の解説によつて『知覚の現象学』におけるメルロー＝ポンティの目的が成就したのではなかつた。メルロー＝ポンティによれば「対象となつてゐる世界の手前に生きられた世界を暴き出した顕在化は、生きられた世界そのものに対しても続行され、現象野の手前に超越論的領野を暴き出る」(PP 73)のである。したがつて現象野における身体の検討を介して、現象野の手前にある超越論的領野への展望が開かねばならぬことだらう。

作動しつつある指向性

ゲシュタルト理論の成果を取り入れながら、メルロー＝ポンティは知覚、特に視覚を次のように説明する。見る者は対象への接近を〈眼差し〉という仕方で直接に知つてゐる。これは私自身の思惟が不可疑であるとの同断で

ある。その際見る者は、己の向かっている対象に眼差しを開き、他方でその対象の周辺部には眼差しを開めずのである。
 つまり見る者は対象をより良く見るために周りのものを眠らせる。⁽³⁾ 「対象を眼差すことはそこに身を沈める」とであり、
 またある対象が現れるとき、他の対象を隠さずにはおかないような系を諸対象は形成していくのである」(PP 82)。
 ところで見る者は己の眼差しを自由に動かすことができるのである。今度はほんの少しでも見えていたものが、今見えてい
 るものによって隠され周辺部に移される。いわば「眼差される対象は自己を生氣⁽⁴⁾でけ、開花し(*se déployer*)、他の対
 象は周辺部へと遠のく」(PP 82)のである。一つの対象が「自己を現せる *se montrer*⁽⁵⁾」とは必ず他の対象は隠
 されるのである。

見る者の眼差しが閉ざされている周辺部の諸対象の方はどうであろうか。眼差された対象によってそれらは隠されて
 いる。しかし隠されたそれら周辺部の対象はそこにあることを止めるわけではなく、見る者に対して己を開いているの
 である。このような事態はどう理解されるだらうか。「ある対象を眼差すことはそこに住まうようになる」とであり、
 そこから他の一切の対象をそれらが己の対象に向かっている面にしだがつて捉えねりんやねる」(PP 82)。このように理
 解された「対象—地平」という構造、すなわち「展望 perspective」は地平における対象相互間の隠蔽関係を表すもの
 なのである。

ところでこの展望において見る者はどこに位置するのであろうか。見る者は、眼差すところによって、地平に共存する
 諸対象のただ中に一挙に身を置くと考えねばなるまい。⁽⁶⁾ 見る者は〈図〉として開花する対象を見るところよりも、むし
 ろ眼差された対象から〈地〉となつて共存する諸対象を見るのである。

以上のようなメルロー＝ポンティの特異な知覚の議論は、時間的な展望についても敷衍されてゆく。眼差されていた

対象は眼差しの動きによって遠のく。ところでも見えなくなるわけではなく、それは現在眼差されている対象に向かはれた面を見せて いる。同時にこの眼差されている対象は次に眼差されるであろう対象が向けて いる面を隠している。⁽⁶⁾ 覚るの場合と同様に時間の展望において見る者は地平に身を置く。働いて いる今の眼差しは指定された過去と未来の表象を持っているのではない。この眼差しは、その働きにおいて、つまり眼差されて いる対象を見る者が身を置くことで、直前の過去（眼差されていた対象）と間近の未来（眼差されるであろう対象）が見る者に見せて いる面を捉える。すなわち見る者は直接的な過去と未来とを地平として捉えるのである。しかるこの地平は直前直後の時間に限られはしない。なぜならば「直接的過去は同じくべきな仕方でそれに先立つ直接的過去を反響して、流れた時間は全面的に現在の中に引かれ留められ捉えられて いる。間近の未来についても同様であり、それもまた〔〕の間近その地平を持つだらう」(PP 83)。

ベルロー＝ボンティエは「サールの用語である「過去保持 Retention」と「未来予持 Protection」の志向性を」のように理解する。「おもいれらの志向性は、見る者と眼差された対象との関係において指定される対象的（客観的）な時間の中にはなく、見る者が一挙に身を置く地平における働く志向性である。これらの志向性のおかげで、知覚の現在は絶えず流れ去りやすくと考えられる事実上の現在である」とをやめ、「対象的な時間中の固定点、それと確認できる点となる」(PP 83) のである。やわらかいの点は対象的な時間の中に指定されたものではない。この固定点は地平を捉える志向性の起点であり、対象的な時間の外に現象野を構成するのである。

ベルロー＝ボンティエは、対象指定の志向性と地平を捉える志向性との違いに留意して、前者を「作用の志向性 intentionnalité d'acte」⁽⁷⁾ および「表象の志向性 intentionnalité des représentations」⁽⁸⁾ と呼び、後者を「作動しつゝある指向性 intentionnalité opérante」⁽⁹⁾ および「現存 existence」⁽¹⁰⁾ とする。見る者が眼差して いる対象に

拳に身を置き、そこで作動しつゝある志向性が地平を開いてくる、同じことだが、この志向性が地平に張り巡らわれているのであるならば、身体と世界との関係が改めて問わねばならないだろう。それらの関係が解明されたときに初めて、メルロー＝ポンティの知覚論が単なる比喩ではないことを理解されるだらう。

現象的身体

メルロー＝ポンティは、身体が指定的な意識にとっての対象としての物体であれども、いわゆる「対象的身体 corps objectif」であることを否定する。作動しつゝある志向性を見いたした今、メルロー＝ポンティは身体といふの志向性との関係を問題化する。眼差し働きによって見る者が眼差される対象へと、すなわちの対象を含み込んでいる地平へと一举に身を置くのは、身体こそが地平に根を下ろしているからではないだろうか。そこでメルロー＝ポンティは作動しつゝある志向性によって地平に根を下ろした身体を「現象的身体 corps phénoménal」^{レヴィ}。この現象的身体が「媒体 véhicule」(PP 97) となり「世界内存在の運動 mouvement de l'être au monde」(PP 93) を遂行する。世界内存在の運動は見る者の身体の現象野への超越であり、現象的身体は現象野における軸、固定点となるのである。
ところで見る者の身体は、見る者自身にとっては一つの謎めいた存在となつてゐる。なぜならば物の方は見えたり見えなかつたりするのに對し、見る者の身体は常に知覚されているのである。しかし身体は知覚されているからといって、対象として現前するのではない。「遠ざけられ、最後には私の視野から消え失せん」といふができるからこそ対象は対象である」のだが、身体の方は「私の一切の知覚の周辺に留まり、私と共にある」(PP 106)。己の身体は絶対的な永続性であり、それは知覚において「地 fond」の役を果たすのである。

一体、地平における現象的身体はどのようにして知られるのであらうか。それは作用の志向性によつては捉えられない。なぜならば作用の志向性は対象的身体を与えることはできるが、絶対的な永続性である「地」としての身体はこの志向性を越えてくるのであるから。しかしながら私は「己」の身体を知つてゐることを確信してゐる。

ソニでは、あるものが捉えられるときの、その捉えられ方が問題となつてくる。指定的な「……と思ふ」の秩序には属さない仕方が模索されねばならぬ。メルロー＝ポンティは、現象的身体の知られ方が指定的な思惟の秩序には属さないものであることを主張する。例えば幻肢を感じる患者の症例において、メルロー＝ポンティは幻肢の消失が世界内存在の運動を介して進行すると考へるのであつて、それは表象の作用とは無縁である。メルロー＝ポンティは身体に世界へと向かう運動の力を認め、この超越の運動の力を「実存的脈動のエネルギー énergie de la pulsation d'existence」(PP 95) と呼んでゐる。

私の身体を私が知つてゐるといふことは、私は身体の超越の運動の力を知つてゐるといふことには他ならないであらう。メルロー＝ポンティが言つようなど「私の身体が現れる際には、私の身体の不在やこの身体の様相でもえをも考えられないとして、何ものかがあらねばならぬ」(PP 107) のである。現象的身体によつてこの力が担われてゐるのでではなく、この力こそ現象的身体そのものであるのではなかろうか。身体は世界内存在の運動の媒体であると同時にこの運動の力でもあらうといふことになるわけだが、だからといって私の身体が私によつて知られてゐるといふが説明されたわけではない。力である現象的身体はこのようにして捉えられてゐるのであらうか。

メルロー＝ポンティは、古典的心理学が他の物体から自己の身体を区別する特徴として見いだした身体の「運動感覺 sensations kinesthésiques」の概念に注目する。これは私が私の身体とともに為す運動の独自性を表してゐる。「私

の身体を私は直接的に動かし、それを他のところへ動かすために、私は私の身体を客観的な空間の一点に見いだしたりはしない。私は私の身体を捜す必要はない。私の身体は始めから運動の終わるところに触れており、身体自身がそこへと身を投じるのである」(PP 110)。

我々は、力である現象的身体を捉える手がかりを身体の運動感覺に求めた上で、生きられた、あるいは受肉した身体の吟味に取りかかろう。だがその際問題化されるのは「現象的身体とは何か」ではなく、「私に対する現象的身体が力として如何に現れるのか」である。これは私による私の身体の経験がどのようにして成立するのかという問題に帰着する」とになるであろう。

「自己の身体、あるいは身体図式

例えは私は自分の手を客観的空間の中に位置付けた上で捜す必要もなく、自分の手の所在を知っている。もし手が客観的対象であったならば、それは対象化され、同時にこの対象との関係を指定する主観が想定されねばならないだろう。ところが私は自分の手がどこにあるのかを知るのに、こうした指定的意識の助けを必要としない。私の手は対象として顕在化されることなく私によって知られている。認識の対象としてではなく、私は私の手を、私の身体をどのように捉えているのであるうか。

この問いに答えるためにマルロー＝ポンティエは二つの概念を導入する。一つは「身体図式 schéma corporel」であり、他の一つは「自己の身体 corps propre」である。自己の身体は、いわば内部から知られるか「あらや」の私の現象的身体である。私の現象的身体は、どのように現れるのか。現象的身体の私への現れを私は如何に捉えるのか。そこに私

による私の身体の経験が存しているはずである。

初めにメルロー＝ポンティにしたがって、身体図式の概念の変遷を見ておこう。「身体図式は、幼児期を通して、触覚的、運動感覺的及び関節に係わる諸内容が相互に連合し、あるいは視覚的内容とも結び付いて、それらをより一層容易に喚起するようになるにつれて徐々に現れる」(PP 115)と考えられていたのだが、実のところ身体図式の概念は連合説の定義をはみだして用いられていた。身体図式によって理解されていた身体の空間性は部分の寄せ集めではなく、「全体から部分へと降りてくるのでなければならない」のであり、「身体図式が習慣的な身体感覺 *cénehstésie* の残滓であるかわりにその構成法則になら」(PP 115)のやなければならない。そうでなければ例えばアロニリー^(註)という現象は身体図式によつてはうまく理解できないやうである。こうして身体図式は「私の構え posture についての包括的な自覚、ゲシュタルト心理学の意味での一つの〈形態〉である」(PP 116)こととなる。

身体図式が私の身体の諸部分についての包括的な意識ではないのはもちろんのことであるが、右の身体図式の定義もそれだけで満足のゆくものではなかった。ゲシュタルトの定義によつて示された現象が可能であるのは何故かといふところ、問われねばならないのである。この問題に答えるためにメルロー＝ポンティは身体の空間性とその運動性に注目する。身体の空間性、運動性は身体とその周囲の対象との位置の関係、及びのよろにして構成された空間内での身体の移動を意味するのではなく、身体においていわば身体内部に成立する空間性であり運動性を意味している。

私は自分の手がどこにあるのか、自分の身体がどこにあるのかを、それらが外的対象と結ぶ関係〔位置の空間性 spatialité de position〕(PP 116)において、知解するのではない。一つの形態としての私の手は顕在化されることなく、灰皿に置かれた煙草へと伸びてゆく。伸びてゆく手が私の手である」とに疑いを挿む余地はない。「血[!]の身体は、

図と地という構造の、いつも明示されぬいとのない、第三項である」(PP 117)。皿[1]の身体が地と図の構造における

第二項である理由を、メルロー＝ポンティは、身体の空間性、運動性の分析を通して説明する。

身体の空間性、運動性を明らかにしよう。指で自分の鼻を指示するように要求されたある精神盲の患者がその行為をやり遂げる事ができるのは、鼻をつかむことを許された場合である。行為の途中でその動作を中止するよう命ぜられたり、鼻に触れるための補助手段が必要とされる場合には、その行為は不可能になる。⁽¹⁾ したがって「身体に関してさえへつかむこと」⁽²⁾ 「触れること」は「指示する」といふとは別のことであるのを認めなければならぬ。(…)⁽³⁾ つかむという動作はその目標をあらかじめ先取りするからいや始まるのである。なぜならばつかむことを禁じるだけでその動作を抑止することになるのであるから」(PP 120)。

指示する動作に対し、つかむという動作の特権が認められる。「私の身体のある点は、つかむという予料の際、指示されるべき点としては私に与えられていないくとも、つかむべき点として私に対し存在しうる」(PP 120) のである。⁽⁴⁾ つかむべきものとしての鼻がどこにあるのかを患者は知つてゐるのに、どうして指示されるべきものになるとそれがどうあるのか彼にはわからなくなってしまうのであるうか。

ここで我々はつかむという動作においては現れるが、認識の対象となると現れないこともある身体空間の存在を認めなければならないだろう。先の患者はある具体的な動作をするように求められると、その命令を問い合わせ返すような調子で繰り返し、次に自分の身体をその課題が要求する全体的な姿勢へと置き、やっとその動作を行う。⁽⁵⁾ 健常者であれば、求められた動作を普通その動作が現れる状況から切り離して行うことができる。しかしこの患者は一つの具体的な動作をその動作が現れる状況から抽出することができない。そのためには、全身をいの動作に協力させ、自分の身体を課

題が要求する全体的な姿勢の中に置くことによってしか、その動作を為すことができない。例えば患者が軍隊式の敬礼を行うときには、それと一緒に敬意を表す外面的な特徴まで現れるのである。⁽¹³⁾

健常者においてはなかなか気付かれない身体空間の存在に、かえってこの精神盲の患者においては気付かされるのである。私の身体を私が知るために、何も自分の身体を認識の対象とする必要はないのである。「私が熟知している諸行為を支えるものとしての腕、あらかじめその領域や有効範囲が私に知られている一定の行動の力としての身体が存在する」(PP 122) のである。

先の精神盲の患者に認められる他の特徴にも目を向けてみよう。この患者は、触れられた身体上の箇所を捜すよう命ぜられると、自分の身体全体を動かすことによって、徐々にその場所をつきとめる。また受動的に運動を被つた際には、患者は運動があることを感じはするけれども、それがどんな運動か、その運動の向きはどういかを言うことができない。この場合にも患者は能動的な運動に助けを求めてゆく。⁽¹⁴⁾ 患者は、触れられた部位がどこにあり、受動的な運動が何かを捉えるために自分の身体の全体的な運動を要するのである。やはり患者は「準備運動」によって自分の身体を頭在的な知覚対象にしようと努める」(PP 125) のである。正常な被験者であれば準備運動を行なうだけでなく、触れられた部位を知ることができるだらう。「健常者ではそれぞれの身体的な刺戟は、頭在的な運動 *mouvement actuel* の代わりに、一種の〈潜在的な運動〉 *mouvement virtuel* を呼び起し、求められてくる身体の部位は匿名の状態から脱し、それが特別の緊張によって血口を知知するのである」(PP 126)。正常な被験者においては、身体上の指示されぐべき部位は「図」の状態にまで顕在化されることがなく知られていく。

我々は「運動の力としての身体自身によつて保証された、一つの結果の予料あるいは把握、一つの〈運動企数〉 Be-

wegungsentwurf」¹⁵⁾の運動志向性 intentionnalité motrice」(PP 128) の存在を認めねばならぬ。」の運動志向性いや身体の構えなのである。始源的な意味において、身体空間は身体の運動志向性の場として構成される空間性であり、身体運動は、」の志向性の「投射力 puissance de projection」(PP 139) の現実態としての運動性であるところなす」とがである。

上に挙げた精神盲の二つの症例から、自己の身体が身体の運動志向性において予料されると誤って考えてはならない。なるほど私の身体の部位は顕在化されることなくこの運動志向性において予料されるのであるが、メルロー＝ポンテ¹⁶⁾は、「自己の身体が図と地の構造の、明示されない」とのない、第三項であると記したのである。あるいは「対象的」という言葉を厳密に取れば、身体の運動志向性において予料される身体の部位もやはり対象的に構成されている。

精神盲の患者が触覚的所与の場所の確定のために身体全体の運動を必要としていることが、注目されねばならない。患者は触れられた部位を図の状態へまで移行させるために、全身の運動に助けを求める。患者が捉えるのは、触れられた部位ではなく、むしろ触れられた部位に対する自分の運動の方である。何故患者は自分の身体の運動を求めるのであるか。

力としての身体

先の精神盲の患者が被つて居る障害は一体なんであるのか。身体のあらゆる部位が図として顕在化する際に、彼は、外的諸対象との関係からなる位置の空間性にではなく、「状況の空間性 spatialité de situation」(PP 116) に身を置いたり、また身体の全体的な運動によっての空間を描き出す。患者はまず最初に、図が図として顕在化するための場と

したの「身体性の地帯 zone de corporeité」(PP 119) を準備しなければならない。患者は運動を介して、運動とともに、図の顕在化を始めからやり直さねばならないのである。患者の障害は、身体の運動志向性を自覚めさせる」となくしては事が始まらないといふ、この一点にあるように思われる。

ベルロー・ポンティは、身体の運動志向性としての投射活動を意識の始源的な様態であると考える。したがって「意識は始原的には〈…と私は思う〉 je pense que ではなく、〈私はやめる〉 je peux やある」(PP 160) とした。「私はやめる」はフッサールの用語の援用である⁽¹⁾が、この用語は、現象的身体を力として了解するためには最適であった。世界内存在の超越の運動の力は、身体の運動志向性において現実態となつている力に他ならないのである。

ところで、なぜ精神盲の患者は身体の運動性を改めて自覚めさせることを必要とするのであるか。それは、患者が身体の運動志向性において現実態となつている力を統覚し直さなければならないからに他ならない。もしそれが統覚されていたのであれば、患者はわざわざ身体の運動志向性を顕在化するようなことは決してしなかつたであろう。患者においては現実態となつているこの力を捉えているはずの根本的な意識が欠けているのである。

我々は「私の身体は構えとして私に現れる」(PP 116) と結論することができるだろう。ただしその意味を正確に把握しなければならない。先に述べたように、身体の構えは身体の運動志向性であるのだから、身体の構えが私に現れるところとは、身体の運動志向性において予測される身体のある部位についての意識によってではなく、私の構えについての包括的な自覚において成立する。つまり構えの自覚は身体の運動志向性そのものについての意識を必要とするのである。そしてこの運動志向性は力として統覚されていなければならない。この力の経験こそ、内部から見られたかぎりでの現象的身体の、すなわち自己の身体の経験である。自己の身体が地と図の構造において明示されないのは、それ

が身体の運動志向性において現実態となつていて、力の経験であるからに他ならない。身体図式が意味するのは、自己の身体の経験が力の経験であるということである。我々は、私による私の身体の経験が身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であることを認めなければならないのである。

ところで、身体図式の理論にはもう一つ別のファクターが介在するのである。

「結びつけられるものについての意識は、結びつけるものと結びつけるその働きについての意識を前提とし、対象意識は自己意識を前提とする、あるいはむしろそれらは同義語である」(PP 274) とメルロー＝ポンティは述べる。この定義を身体図式に適応すれば、自己意識は身体の運動志向性についての意識ということになる。後者の意識は身体の運動志向性において現実態となつていて、力の統覚であった。すなわち自己の身体を力として統覚することこそ自己意識なのである。私による私の身体の経験が私による私の経験でもある秘密はここに隠されている。

この問題は先送りされてしまうのであるが、我々は次にメルロー＝ポンティの身体概念を別の場面において検討してやかなければならぬ。これまで我々は自己の身体をいわば内部から検討し、意図的に一つの制限を加えてきた。その制限は外的空間の捨象である。しかしながら「一切の図は外的空間と身体空間の二重の地平に姿を現す」(PP 117)。外的空間との関係において、身体図式と身体の運動志向性とを我々は検討しなければならないのである。

自己の身体と感覚の主体

超越論的自我 Ego transcendental を想定し、感覚するところを感覚するという思惟に還元し、感覚作用を一つのメカニズムにおける因果関係として捉えること、メルロー＝ポンティは徹底的に反対する。もし超越論的自我が一切の

経験を構成する主觀であったならば、我々は自分を自分の身体と同一視することなど決してできなかつたであろうし、精神の洞察によつて捉えているものを自分の目で見ているなどと信じる」とはできなかつたであろう。⁽¹⁸⁾ 先に我々は、現象的身体が指定的な意識によつて対象として構成されるのではなく、力として統覚されており、身体の運動志向性は原始的な意識の様態として「私はできる」であつて「私は思う」ではないことを示したところである。感覚されるものと身体の運動志向性とはどのように係わり合うのであらうか。

例えば小脳または大脳皮質の疾患の運動性障害において観察される、感覚刺戟の筋緊張に対する影響の特徴は、腕を上げる運動が視野の色によつてその範囲と方向を変えられるということである。緑の視野によつて被験者の手の運動は正確であるが、赤い視野では不正確になる。外へと向かう運動は緑によつて速められ、赤によつて遅らされる。皮膚上の刺戟の位置は赤によつて外側へと変えられる。黄と赤は重さと時間の算定の誤りを強め、青と緑はその誤りを補正する。⁽¹⁹⁾ 感覚は純粹な性質として捉えられているのではなく、それは「運動的相貌」(PP 243)とともに現れるのである。

ところで色の運動的相貌が感覚的性質としての色によつて引き起こされると考えてはならない。「感覚される色の効果はそれが行動に及ぼす影響とは必ずしも正確には対応しない。例えば私がそれと氣付くことなく赤色は私の反応を強化する」(PP 243)。視野の色は確かに私に一つの見方を促すが、この見方は純粹性質として感覚内容を対象的に指定する表象の働きとは明らかに無縁である。カンディンスキイは「緑色は我々に何も要求しないし、我々を促すこともない」と言い、ゲーテは「青色が我々の視線に屈する」とか「赤色は目に突き刺さる」と言つた。⁽²⁰⁾ こうした表現が可能であり、意味を持っているとすれば、それは感覚が、即自的存ではなく、身体の運動的相貌と結び付いているからに他ならない。何故感覚は身体の運動的相貌と密接に係わりあうのであらうか。

マルロー＝ポンティは感覚するものと感覚されるものを志向的な関係として捉える。「感覚するものと感覚されるものは二つの外面的な項として対面してゐるのではなく、また感覚は感覚するものの世への感覚されるものの侵入ではない」(PP 247-248)。感覚するものと感覚されるとの志向的な関係は「対比 s'accoupler」(PP 248, 370) の現象として了解されね。我々は対化の現象を明らかにしなければならない。この現象に身体の運動志向性が係わっているのである。先に身体の運動志向性において身体空間が構成されることが示された。しかし身体の運動志向性が構成するのは身体空間だけではない。

別の精神盲の患者は扉をノックすることができないが、その扉が隠れていふとか、単にその扉が手の届くところにないというだけで、この患者はもはやノックできなくなる。扉が手の届くところにない場合、目を開け扉に目を固定していくが、患者は虚空に向かって扉を叩いたり開けたりする仕草を行ふことができない。⁽²⁾ しかしこの患者は扉を見、手の届くところにあれば扉をノックするのであるから、視覚の欠損はいゝでは問題とははないといふ。見、潜在的な接触の場の崩壊と思えるような現象が起こっている。

この患者の症例は、身体の運動志向性が、身体のある部位を予料するだけでなく、身体空間を越えて、外的空間へと食い込んでいることを示すだらう。感覚されるものを予料する身体の運動志向性は外的空間を構成している。身体の運動志向性は作動しつゝある志向性の別の名でしかない。正常な被験者（あくまでは習慣的な動作を行ふ場合の精神盲の患者）においては、感覚されるものの「一種の距離を置いた引力 une sorte d'attraction à distance」(PP 124) が、身体を「世界のしかじかの領域に対する能力 puissance de telles et telles régions du monde」(PP 123) へひきいひむるふうじがである。

「」の患者は、扉が身体との接触を保つかぎりにおいては、いまの身体の運動志向性によって構成される身体空間におれば、自己の身体を力として経験し、ノックと、う行為を遂行する。身体空間を越えたといふに、患者は行為の不全に陥ってゐる。潜在的な接觸の場の崩壊かと思われたものは、実は身体空間と外的空間との関係として問題化される必要があらう。患者においては、身体の運動志向性は、外的空間を構成する際に、弛緩する。感覚するものと感覚されるものとの対化の現象は、身体空間と外的空間との関係へと転化されるのである。

感覚するものと感覚されるものとの対化の現象は、したがつて、身体空間と外的空間との同調と考えられねばならないだらう。身体の運動志向性は身体空間と外的空間を貫くのである。マルロー＝ボンテイは「感覚の主体は、一種の実存の場にその場といふに生まれ co-naître、その場と同調する se synchroniser するの力である」(PP 245)と表現する。やわらん外的空間においても、自己の身体は力として扱えられて、なければならない。やうであるからこそ正常な被験者は虚空で扉を叩く仕草をすることが出来るのである。身体の運動志向性が設立する身体空間及び外的空間において、自己の身体は力として統覚されてゐる。自己の身体が、身体空間であつても外的空間であつても、図と地の構造において明示されぬことのない第三項であるのは、いうした事情によるのである。

我々は、先に身体空間を検討した際の結論をいいで補完しなければならぬだらう。身体の運動志向性は、単に身体空間へしての身体の構えやあるだけではなく、対象への「開口 ouverture」(PP 113, 136)であり、世界に対する構えなのだ。「私の身体の一つ一つの構えは、直ちに私にひいてはある光景に対する能力であり、一つ一つの光景は私に」といへば、それが運動感覚的な kinesthésique 状況におけるものであらう(PP 349)。身体図式は、身体の運動志向性が貫く身体空間と外的空間において、明示されぬことなく自己の身体が力として統覚されている事態を表

明するのである。

ソレハメルロー＝ポンティは、感覺する主体の匿名性あるいは無記名性を導入する。「感覺を経験する度ごとに、私は感覺が（…）すでに世界に加担し、その諸局面のいくつかに開かれ、それらと同調して、いたもう一つの我と係わるのを體驗するのである」（PP 250）。感覺する主体は、いわば専門化された自然的な我、すなわち見る私、聞く私、触れる私である。こうした自然的な我は、自己の身体が力として統覚されていることを前提とする。この統覚は、感覺するものと感覺されるものとの間の「原初的な獲得物の厚み」（PP 250）である。「もし知覚的経験を正確に表現しようといふならば、私はひとが私において知覚すると云ふべきであつて、私が知覚すると言つてはならないのである」（PP 249）。

以上からメルロー＝ポンティの身体概念は明らかになつたであろう。身体図式の理論によって我々は現象野における現象的身体を感じることを学び直したのである。⁽²²⁾そして「身体図式は単に私の身体の経験だけではなく、さらに世界の中ににおける私の身体の経験でもある」（PP 165）。由[口]の身体は、世界そのものへと向かう身体の運動志向性において力として現れる。私による私の身体の経験は、世界内存在の超越の運動の力の経験であるのだ。また現象的身体を見いだした際我々が言及した眼差す者と眼差されるものとの特異な関係も、ここにおいて了解されたことである。

超越論的領野としての身体

最後に、我々は先送りにされた問題についての見通しを開いておかねばなるまい。私による私の身体の経験が私による私の経験であるのは、身体の運動志向性において現実態となる力の統覚が自[口]意識であることによる。といひやうの

力は行動という時間現象となって発現するのに対し、力の統覚としての自己意識は時間現象とはならない。仮にこの自己意識が力を構成することによって、時間現象となるとするならば、今度はそれを構成する作用についての意識が必要となり、自己意識は無限に回送されることになろう。力の統覚である自己意識は、何ものも構成しない。それゆえに自己意識は現象野の手前の超越論的領野に留まるのである。マルロー・リポンティが示唆していくように、超越論的領野への展望が開かねばならないのである。

ところで「我々の身体は空間の中にあるとか、さらに時間の中にあるとか言つてはならない。身体は空間と時間に、住まう（取り憑く）のである」（PP 162）。マルロー・リポンティが「住まう（取り憑く）」と言うのは、もちろん身体が超越の運動そのものになってくることを考慮してのことであろう。私による私の身体の経験が、身体の運動志向性において現実態となっている力の経験であるからこそ、「身体は必然的に〈いま〉にあり、同時に必然的に〈いま〉存在する」（PP 163）のである。

しかしこれは身体の永遠化を意味しない。世界へと向かう身体の超越の運動は、その運動そのものによって、運動の全過程にわたって揺るがされている。したがって私による私の身体の経験である力の統覚は絶えず更新されており、自己意識は、超越の運動の全幅において、統一を実現していかなければならない。

さらに、感覚するものと感覚されるものとの対化の現象、身体空間と外的空間との同調は、身体による世界の空間化であり時間化である。身体は、絶対的な〈ここ〉と〈いま〉とを分泌する。身体は空間と時間に取り憑き、「それらに貼りつく」（PP 164）のである。

我々が超越論的であるとみなす領野は、身体が分泌する〈ここ〉と〈いま〉の裏面でしかないであろう。力の統覚で

ある自己意識はそこに隠れているのである。それは時間現象とはならない。自己意識は、時間現象の観点から見れば、一種の欠如態であり、時間からはいつも逃れ去るのである。

我々は『知覚の現象学』における身体概念を分析することによって、私による私の身体の経験が、身体の運動志向性において現実態となつてゐる力の経験であり、メルロー＝ポンティによつてこの力の統覚が自己意識とみなされていることを明らかにした。主觀性の問題は、コーギーの検討において、メルロー＝ポンティによつて自覺的に取り上げ直される。実のところ身体概念はコーギーに直結していたのである。コーギーは身体に結び直されねばならない。「我思う、我在り」という命題において、二つの断言は全くの等価であり、そうでなければコーギーは存在しないであらう」(PP 439) とメルロー＝ポンティが語るとき、思惟実体としての精神の存在が問題となつてゐるのではなく、コーギーとしむに、私の身体の存在こそが問題化されているのである。メルロー＝ポンティは、コーギーの検討において、私による私の身体の経験が私による私の経験であることを果たしてうまく示すことができたであろうか。我々はメルロー＝ポンティのコーギーをこの観点から改めて検討し直さねばならないのである。

註

Phénoménologie de la perception, Editions Gallimard, Paris, 1945. からの引用、参照箇所は略記号 PP の後に頁数を並記す。
ノルマンド＝ヤン。

- (1) Voir aussi PP 231.
- (2) PP 68.
- (3) PP 81.

- (4) PP 82.
- (5) Voir aussi PP 82. 「隠在的」諸事物の中に身を置く「い」と書いて、私はすばやく様々な角度から私の現在の視覚のせんせいだ
「い」と対象を捉えapercevoirでいるのである。」
- (6) 眼差されている対象が他の対象を隠すところへ隠された対象が見ゆる者に対して「口を開いておる」んだ、同じ事態の異
なつた表現に過ぎない。
- (7) PP XIII, 141, 478, 490.
- (8) 私の身体が他の対象から区別されるための特徴として、マルローは「*シナリヤ*」または身体の「二重感覚sensations doubles」
及び身体が「情感的対象 objet affectif」であることを擧げている (Voir PP 109-110)。
- (9) マルロー=ボンティは一方で確かに「現象的身体とは何か」に答えようとしている。その際現象的身体は外から見られたか
あるいは規定を持つ。例えば「現象的身体は、自らの周囲に一つの環境を投射するかあるいは身体、その〈諸部分〉がたがい
をダイナミックに知り合い、またその受容器がそれらの共働作用によって対象の知覚を可能にするように配置されているかぎ
りでの身体である」(PP 269) という。現象的身体のこうした規定には「器官としての身体 corps organique」の性格が強
く、現象的身体が本来持っている性格を捉え損なう恐れがある。それゆえ我々は「現象的身体が如何に現れるのか」という観
点に立つのである。
- (10) 感覚体側転倒といふ症状をやす。『知覚の現象学』一(みやや書房)の記註(11回〇頁)を参照。
- (11) PP 120.
- (12) PP 121.
- (13) *Ibid.*
- (14) PP 124.
- (15) PP 126.
- (16) Cf. PP 124.
- (17) 「の照耀だ、ト・キーヌの『シグニ』はかの援用である。それが『シグニ』(Signes, Editions Gallimard, 1960.
p. 210)、あた『既えゆるの既えだらけ』及びそれを付された註解ハーレ(Le Visible et l'Invisible, Editions Gallimard,

1964.) ヨガによる瞑想研究。

- (18) PP 241.
- (19) PP 242.
- (20) PP 244.
- (21) PP 136.
- (22) PP 250.
- (23) PP 239.

(博士課程学生)